自分の得意な分野を活かして、今までにないものづくりをしていきたい。

25
2023

松井敬祐
製造 / 渉外

子供の頃から絵を描くことが好きで、大学では美術系に進んだという松井さん。大学時代は、様々な分野に挑戦してみたいと油絵、日本画、テンペラ、陶芸、版画など学びました。卒業後は地元のテーマパークに勤務していましたが、お父様から「人が足りないから帰ってきてくれないか」と相談され、家業である畳縁地の製造を継ぐことを決めました。お父様も先代が病に倒れたことがきっかけで家業を継いだことを聞いていたため抵抗はなかったといいます。

「実は、学生時代まで自分の家業がどんなことをしているのかよく知らなかったのです。でも、今になってみると何か通ずるものがあったのかなと感じています。」と話す松井さん。

入社時から織りの現場を任され、入社4年目となる現在は、織機の準備、織り、糸の補充のほか、織機のメンテナンスや修理、営業までもこなしています。

畳縁地は、たて糸180本と上糸、下糸、よこ糸、かがり糸の4本の糸で織っていきますが、その途中で糸を補充したり、停まった織機の調整や修理をしたりしながら、織り上げていきます。「織機はその日の気温や湿度の影響を受けるため、朝と夕方で糸の調整が必要なのですが、最近になってやっと上手く調整出来るようになりました。」、そして、「日々織機と向き合い、試行錯誤を重ねる中、自分が思い付くほとんどのことは先人が既にやっていたことに気づかされています。」と改めて畳縁地の難しさも感じている松井さん。

最後に今後の展望については、「大学で学んだことや自分の得意な分野を活かして、まだ誰も手を出していない分野とコラボレーションした、今までにないものづくりに挑戦していきたいですね。」と力強く語っていただきました。

もっと生の声 Q&A

—— 思い出に残っているエピソードはありますか?

畳縁地の新しい用途を探す取り組みとして、東京の手芸作家とのコラボレーション企画でクリスマスツリー『縁(へり)スマスツリー』を制作したことです。新型コロナウイルスの影響で作家の方がこちらに来られなくなり、私一人で制作することになりました。制作中は大変でしたが、完成したときはすごく達成感がありました。今では毎年制作していて、畳縁地を活用したアート作品として多くの方に喜んでいただいています。

—— 今後挑戦してみたいことはありますか?

まだ誰も手を出していない分野とのコラボレーションです。例えば自分の好きなゲーム分野での商品開発です。ゲーム機器に和柄のデザインを加えるなどの意外な組み合わせも面白いのではと考えています。従来の用途や考え方にとらわれない自由な発想で、今までにない商品づくりに挑戦したいです。

—— 将来繊維業界に従事する人へのメッセージをください。

繊維業界は今、あまり良い状況ではありませんが、この業界に従事しているその人自身が、単なる仕事としてとらえるか、創造性が必要なものづくりとしてとらえるかで会社、さらには業界も変わってくると思います。この業界に興味があるなら飛び込んだほうがいいと思います。私は、もう一度繊維業界は盛り上がってくると思っています。